

オレリエン・ハンターの スイスへの誘い

再会の秋(上の巻)



10月4日から14日まで、母が日本に来ました。1年3ヶ月ぶりの来日でした。8月の中学生海外体験事業のときにスイスで会い、母は何回も来日したことがありますが、秋はまだだったので、日本の紅葉が見たいというわけで10月に来ました。私も長い間忙しくて、夏休みを取らずにいたわけで、母の来日をきっかけに「秋休み」を取りました。今回と次回、母と過ごした秋休みの間にできた思い出や、懐かしい友人達と再会した喜びなどを皆さんに紹介したいと思います。

10月3日は母の誕生日ですが、お互いの旅立ちの日でもありました。母はスイスからアムステルダムまで飛んで、そこで乗り換えて日本へと向かい4日の朝に到着する予定でした。一方、朝迎えに行くために私も3日に津山を後にして大阪へ行きました。朝早く関空へ行くのに便利な新阪急ホテルに部屋を予約していったのですが、一人で食事して帰って寝るだけというのが寂しくて、大分会っていなかった大阪の友人に電話をしてみました。守宏君は突然の電話に驚きましたが、すぐ会いに来てくれました。自転車に乗ってやってきた守宏君は全然変わっていませんでした。知り合ったのは彼がジュネーブで留学していたときでした。日本語学科の同級生に紹介してもらって、音楽の趣味が似て、二人ともお酒が好きということがきっかけですっかり仲良くなりました。大阪出身の守宏君が関西弁のことを教え、バラエティー番組のビデオとかを貸してくれたりして、とてもおもしろい人です。大阪駅周辺に二人の行きつけの店があるのですが、定休日のため別の居酒屋に行って、旬の秋刀魚などを食べ、お酒やビールを飲み長らく語り合いました。守宏君と話すのが楽しくて、時間がいつもあっという間に過ぎていきます。

翌朝、母を迎えに関西国際空港へ向かいました。が、朝のラッシュアワーに当たって、リムジンバスがなかなか進みません。もう少し早くバスに乗ればよかったと後悔しながら、慌てて到着出口を目指しました。母が落ち着いてタバコを吸いながら私を待っていました。ホッとしました。お互いの近況を話しながらまたリムジンバスに乗って大阪市内に戻り、高速バスに乗り換えて津山へ帰りました。その夜は、自家製マッシュルーム・パスタを作り、再会を祝って赤ワインで乾杯しました。

10月5日、合併した鏡野町を案内しました。母が去年の7月に来日したときに合併の話をしていたのでどうなったかを見せました。車で上斎原へ行くと、ルーマニアの田舎で育った母がさらに鏡野町の大自然と田舎の風景に惚れました。私も休みモードに切り換えて、2日間朝寝をしたり、いろいろなことについて話し合ったり、喫茶店でんびりしたり、美味しいものを食べたりして、大河に浮く小船のように時間がゆっくりと流れました。ずっとゆっくりすればよかったかもしれませんが、10月7日から、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」を見に行く事になっていました。そう、山形まで行ってきました。新幹線で行くと半日ぐらいかかるにもかかわらずとにかく高くつ



「なかよし風車」を見に
男女山公園へ

くとも思いましたから、私たちは大阪まで高速バスで行き、そこから飛行機で山形に入りました。山形へ行った理由を説明します。まず2年に1回というペースで開催される珍しい映画祭ですから見に行ったわけですが、特に今回の映画祭に参加したかった理由はもうひとつありました。それは、学生時代に大変お世話になった人々がスイスと日本の共同プログラムに参加するために山形に集まったからです。通訳者としてチャンスを与えてくれたニヨン映画祭のディレクター、ジャン・ペレーさん、9月に結婚した(前号参照)河瀬直美監督を始めとして、私の映画仲間と再会したくて山形へ行くことにしました。

こんな訳で、映画が大好きな母と一緒に、10月8日から10日まで、「私映画から見えるもの—スイスと日本の一人称ドキュメンタリー」というプログラムを中心に映画祭を堪能しました。以下はプログラムの紹介です。

「一人称の「私」が語る物語にはどのような可能性があるのだろうか。山形と交流の長いスイス・ニヨンの『ヴィジョン・デュ・レーン映画祭』(現実のビジョン)と共同企画で、日本・スイスの「セルフ・ドキュメンタリー」の最近作を上映し、ゲストを迎えてディスカッションを重ね、現代の私映画とその表現を探る試み。この企画は2006年4月に『ヴィジョン・デュ・レーン映画祭』でもリレー開催される。6つの上映プログラムでは、ロバート・フランクや河瀬直美など知名度の高い作家や、卒業制作が完成したばかりの学生、実験映画の先駆者など幅広い作り手の新しい私映画が上映される。カメラを持った若者が親と対面するタイプのパーソナル・ドキュメンタリー(『パリッシュ家』、『針間野』)は洋の東西を問わず健在だ。スイスからは4つの公用語(ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語)文化圏それぞれの視点を反映した作品群が集まり、現代のスイスを映し出す。また、日本の日記映画の系譜は鈴木志郎郎から前田真二郎まで、確実に継承が見られる。集団制作をした佐藤真の『阿賀の記憶』、女優を起用した『影』、2005年のイメージフォーラム・フェスティバルで大賞を受賞した『ははのははもまたそのははもその娘も』など、一般的には一人称ドキュメンタリーと思われない実験性に富んだ作品も要のラインアップだ。」(山形映画祭ホームページより)さらに、映画の後にディスカッションもありました。「日本の伝統のお蔵を改造したカフェ・ギャラリー 瑠蔵(さくら)がスイス・カフェに変身。本プログラム開催中は毎夕、日英同時通訳付きのシンポジウム会場となる。他プログラムからもゲストを招き、ドキュメンタリー論が白熱しそう。」シンポジウムのテーマは8日「記憶と再生」、9日「のぞき見趣味と癒し」、10日「身体と主観」で、面白くないわけがないと思って毎日参加しました… が、それは次回で紹介します。 つづく…



「ヴィジョン・デュ・レーン」の
ディレクター、ジャンペレー



ディスカッション時の
河瀬監督